孤独の感情[対処行動に及ぼす孤独感]および[耐性]への耐性の影響

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者名</th>
<th>広沢 俊宗</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>研究紀要</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2002年3月</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://id.nii.ac.jp/1084/00000194/">http://id.nii.ac.jp/1084/00000194/</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
孤立の感情、対処行動に及ぼす孤独感、
および Aloneness への耐性の影響

The Influences of Loneliness and Tolerance to Aloneness on Feelings
and Coping Behaviors When Lonely

広沢 俊宗*
Toshimune HIROSAWA

抄 録

本研究は、孤独の感情、および対処行動の因子構造を明らかにし、その性差、孤独感強度による差、ならびに Alonenessへの耐性による差を検討することを主たる目的とするものである。また、野本（1999）が構成した CBA尺度（Capacity to Be Alone Scale）をもとにその簡略版 CBA 尺度が作成され、改訂版 UCLA 孤独感尺度、Aloneness への耐性尺度、および携帯電話の使用頻度との関連が吟味された。調査は、大学生を対象に孤独の感情、対処行動、および携帯電話の使用頻度に関する質問紙を、上述した3種類の尺度を用いて実施された。結果は、以下の通りである。
1) 孤独の感情は4因子、対処行動は8因子抽出され、性差、孤独感強度による差、ならびに Aloneness への耐性による差が見出され、過去の研究結果と比較検討された。
2) Aloneness への耐性尺度は、簡略版CBA尺度の2つの下位尺度と関連性が見出され、両者の概念が吟味された。また、孤独感と携帯電話の使用頻度との間にはやや高い負の相関が認められ、孤独感の低い人はその使用頻度の高いことが示された。

1. 問 題

孤独感を研究する際に、Peplau, & Perlman (1982) は、孤独感の先行条件、孤独感経験の諸特性、および孤独感に対処する方法の三者を区別することが有益であるとしている。この考え方に基づいて、広沢 (1985) は、孤独の原因、感情反応、および対処行動に関する質問紙を作成し、大学生を対象にそれらの因子構造を明らかにしている。その結果、孤独の原因は、「積極的な対人接触の欠如」「対人的疎外」「機会の欠如・環境の変化」「対人恐怖」「考え方の相異・性格」の5因子、感情反応は、「抑うつ」「絶望」「人恋しさ」「懐懐」「苛立ち」「疎外感」の6因子、対処行動は、「憂さ晴らし」「趣
味・仕事への没頭」「対人接触」「忍耐・待機」「身近な行動への逃避」「情緒的逃避」「甘え」の7因子が抽出され、これらを説明するいくつかの次元を仮説的に設定し考察している。そして、広沢（1986）は、抽出された因子ごとに性差、および孤独感強度による差を明らかにしている。さらに、広沢（2001）は、孤独に対する原因帰属、感情反応、対処行動、および孤独感との相互関係、ならびに対処行動に関する因子構造の性差を見出している。

また、広沢（1997）は、Alonenessへの耐性尺度を作成し、孤独の感情、および対処行動への影響を男女別、因子別に検討している。その結果、感情反応に関しては、男女ともにAlonenessへの耐性の低い方が、「抑うつ」感を抱き「人懐きさ」や「苦立ち」も強いことが示された。さらに、女子の場合は「恐れ・不自信」も感じやすい傾向にあった。以上より、感情反応については男女でかなり共通した傾向が伺える。一方、対処行動に関しては、男女ともにAlonenessへの耐性が高い方が「積極的独居」をとるもの、男子では、耐性の低い方が「対人接触」、高い方が「忍耐・待機」という行動をとるのに対し、女子では、低い方が「悲しき抵抗」、高い方が「情緒的逃避」する傾向がみられ、対処行動については男女でかなり様相の異なることが示され、行動の方向性（1）対自的、（2）対他的、（3）対大衆的）の次元から考察された。

ところで、ひとりでいることの肯定的側面に初めて注目したのは、小児科医で精神分析家であったWinnicott（1958）であり、彼はその能力をCapacity to Be Alone（以下、CBAと略す）と名付けた。野本（1999）は、この概念を参照しながら、青年期以降のCBAの定義を試みるとともに、充分な信頼性、妥当性が認められたCBA尺度を作成している。この尺度は、42項目から構成されており、因子分析の結果、第1因子は「孤独不安耐性」因子、第2因子は「孤独受容」因子、第3因子は「つながりの感じ」因子と命名された。ここでは、Alonenessへの耐性に密接に関わると思われる2因子（「孤独不安耐性」因子と「孤独受容」因子）に着目し、簡略版CBA尺度を作成した。

そこで、本研究では、大学生の孤独の感情、および対処行動の因子構造を明らかにし、広沢（1985, 1997）の結果と比較検討することを第1の目的とする。その際、対処行動45項目に関しては、現在の大学生のそれにふさわしくなるように若干の修正、および追加を行った。次に、改訂版UCLA孤独感尺度、Alonenessへの耐性尺度、および簡略版CBA尺度との相互関連性、および携帯電話の使用頻度（メールを含む）との関連性を明らかにすることを第2の目的とする。さらに、孤独の感情、および対処行動の性差、孤独感強度による差、ならびにAlonenessへの耐性による差を因子別に検討することを第3の目的とする。

2. 方 法

2.1 質問紙および尺度

2.1.1 孤独の感情に関する質問紙

孤独の感情に関する質問紙は、広沢（1985）が作成したもので、30項目から成っている。反応カテゴリーの形式は、「非常にあてはまる」「あてはまる」「あてはまらない」「全くあてはまらない」の4件法で、孤
孤独の感情、対処行動に及ぼす孤独感、およびAlonenessへの耐性の影響

独に陥ったときの感情にあてはまるほど高得点になるように、1点から4点に得点化されている。

2.1.2 対処行動に関する質問紙

対処行動に関する質問紙は、広沢（1985）が作成したもので、45項目から成っている。これらのうち、2項目については表現を改め（「ディスコに行く」→「クラブに踊りに行く」、「お金の浪費をする」→「お金を使う」）、それ以外に2項目（「パソコンで遊ぶ」、「誰かにメールを送る」）を加え、最終的に47項目で構成された。反応カテゴリーの形式は、「しばしば行う」「時々行う」「どちらともいえない」「あまり行わない」「全く行わない」の5件法で、孤独に陥ったときにしばしば行う行動ほど高得点になれるように、1点から5点に得点化されている。

2.1.3 改訂版UCLA孤独感尺度

Russell, Peplau, & Ferguson（1978）が既に標準化していた尺度を、Russell, Peplau, & Cutrona（1980）が再検討して構成し直したものである。この20項目から成る改訂版尺度は、原尺度でみられた反応バイアスを避けるために、表現内容がポジティブとネガティブの各10項目を各にし、無作答に配列されている。反応カテゴリーの形式は、「しばしば行う」「時々行う」「めったに感じる」「全く感じる」の4件法で、孤独感が高いほど高得点になるように、1点から4点に得点化されており、各被験者の得点は、最高80点から最低20点の範囲内にある。研究では、信頼性、妥当性が充分に認められている。工藤・西川（1983）による邦訳版を使用した。なお、尺度の信頼性を尺度水準で検討するためにα係数が算出されたが、α = .90より尺度の内的一貫性は十分に高いといえる。

2.1.4 Alonenessへの耐性尺度

この尺度は、広沢（1997）によって作成された10項目から成るもので、ひとりでいることにどれだけ耐えられるかを測定しようとするものである。反応カテゴリーの形式は、「非常にあてはまる」「あてはまる」「どちらともいえない」「あてはまらない」「全くあてはまらない」の5件法で、Alonenessへの耐性が高いほど高得点になるように、1点から5点に得点化されている。したがって、各被験者の得点は、最高50点から最低10点の範囲内にある。なお、尺度の信頼性を尺度水準で検討するためにα係数が算出されたが、α = .80より尺度の内的一貫性は十分に高いといえる。

2.1.5 簡略版CBA尺度

野本（1999）は、ひとりでいる能力を測定するために、42項目から成るCBA尺度を構成し、充分な信頼性、妥当性を示している。そして、因子分析の結果、「孤独不安耐性」因子、「孤独受容」因子、「つながりの感覚」因子の3因子が抽出され、それぞれ15項目、14項目、13項目となっている。本研究では、Alonenessへの耐性と密接に関わると思われる「孤独不安耐性」因子と「孤独受容」因子に着目し、各因子に高く得点した5項目、計10項目を選出し、簡略版CBA尺度として用いた。これらは原尺度の第1因子、第2因子に対応していることから、CBAⅠ尺度、CBAⅡ尺度と呼ぶことにする。反応カテゴリーの形式は、「そう思う」「あまりそう思う」「どちらもしていない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5件法で、ひとりでいる能力が高いくほど高得点になるように、1点から5点に得点化されており、各被験者の得点は、下位尺度ごとに最高25点から最低5点の範囲内にある。

2.1.6 携帯電話の使用頻度に関する質問紙

携帯電話の使用頻度については、普段まわりの友達に比べて、携帯電話（メールも含む）でどの程度
度コミュニケーションをとっているかが尋ねられた。反応カテゴリーの形式は、「おそらくしている」「かなりしている」「ややしている」「普通」「ややしていない」「かなりしていない」「全くしていない」の7件法で、携帯電話の使用頻度が高いほど高得点になるように、1点から7点に得点化されている。

2.2 調査対象

対象者は、私立4年制のO大学の学生114名（男子32、女子82）、およびK大学の学生82名（男子64、女子18）の計196名（男子96、女子100）で、学年別内訳は、1年から4年の順に、男子11、16、46、23、女子41、30、23、6で、平均年齢は、20.6歳であった。

2.3 調査の実施

調査は、O大学では2001年1月に、K大学では同年7月に、それぞれ集合調査の形式で実施された。

3. 結 果

3.1 感情反応の主成分分析

感情反応30項目の平均値および標準偏差を示したのが、表1である。この結果より、感情反応としては、「さびしい」（3.17）、「誰かそばにいてほしい」（3.13）、「誰かに会いたい」（3.12）、「誰かに甘えたい」（2.88）といった人恋しが感情が強く、「つらい」（2.99）、「どこかへ行きたい」（2.96）といったつらい気持ちや、「ゆううつな」（2.94）、「不安な」（2.84）といった抑うつ感情の感情が比較的強いのに対し、「死にたい」（1.73）、「恐ろしい」（1.76）、「誰にも会いたくない」（1.91）といった絶望感は弱いことがわかる。

次に、各項目間の相関マトリックスからScreetestにより最終的に因子数を4と決定し、主成分分析を行いVarimax回転後の因子負荷量を示したのが表2である。これらの累積分散寄与率は57.17％で、回転後の因子負荷量の絶対
表2 感情反応30項目のVarimax回転後の因子負荷量

<table>
<thead>
<tr>
<th>因子</th>
<th>I</th>
<th>II</th>
<th>III</th>
<th>IV</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>みじめな</td>
<td>.765</td>
<td>-.029</td>
<td>.018</td>
<td>.383</td>
</tr>
<tr>
<td>情けない</td>
<td>.711</td>
<td>-.039</td>
<td>.137</td>
<td>.365</td>
</tr>
<tr>
<td>わびしい</td>
<td>.668</td>
<td>.015</td>
<td>.255</td>
<td>.083</td>
</tr>
<tr>
<td>離外された</td>
<td>.614</td>
<td>.254</td>
<td>.285</td>
<td>.032</td>
</tr>
<tr>
<td>取り残された</td>
<td>.606</td>
<td>.348</td>
<td>.213</td>
<td>.250</td>
</tr>
<tr>
<td>不安な</td>
<td>.600</td>
<td>.450</td>
<td>.189</td>
<td>.100</td>
</tr>
<tr>
<td>意気消沈した</td>
<td>.586</td>
<td>.161</td>
<td>.449</td>
<td>.046</td>
</tr>
<tr>
<td>つらい</td>
<td>.541</td>
<td>.382</td>
<td>.247</td>
<td>.162</td>
</tr>
<tr>
<td>やりきれない</td>
<td>.538</td>
<td>.353</td>
<td>.290</td>
<td>.234</td>
</tr>
<tr>
<td>卑下する</td>
<td>.525</td>
<td>.017</td>
<td>.400</td>
<td>.273</td>
</tr>
<tr>
<td>見捨てられた</td>
<td>.505</td>
<td>.282</td>
<td>.358</td>
<td>.211</td>
</tr>
<tr>
<td>むんじゃない</td>
<td>.471</td>
<td>.313</td>
<td>.212</td>
<td>.285</td>
</tr>
<tr>
<td>ゆううつな</td>
<td>.461</td>
<td>.324</td>
<td>.354</td>
<td>.043</td>
</tr>
<tr>
<td>誰かそばにいてほしい</td>
<td>.032</td>
<td>.868</td>
<td>.019</td>
<td>.053</td>
</tr>
<tr>
<td>誰かに会いたい</td>
<td>-.004</td>
<td>.868</td>
<td>-.162</td>
<td>.192</td>
</tr>
<tr>
<td>さびしい</td>
<td>.319</td>
<td>.763</td>
<td>.130</td>
<td>-.031</td>
</tr>
<tr>
<td>誰かに甘えたい</td>
<td>.286</td>
<td>.757</td>
<td>.078</td>
<td>.052</td>
</tr>
<tr>
<td>誰かにすがりたい</td>
<td>.421</td>
<td>.665</td>
<td>.313</td>
<td>.142</td>
</tr>
<tr>
<td>死にたい</td>
<td>.106</td>
<td>.018</td>
<td>.697</td>
<td>.100</td>
</tr>
<tr>
<td>逃げてしまいたい</td>
<td>.340</td>
<td>.133</td>
<td>.639</td>
<td>.311</td>
</tr>
<tr>
<td>絶望的な</td>
<td>.422</td>
<td>.145</td>
<td>.613</td>
<td>.243</td>
</tr>
<tr>
<td>何も信じられない</td>
<td>.118</td>
<td>.119</td>
<td>.606</td>
<td>.461</td>
</tr>
<tr>
<td>誰にも会いたくない</td>
<td>.193</td>
<td>-.367</td>
<td>.530</td>
<td>.228</td>
</tr>
<tr>
<td>恐ろしい</td>
<td>.338</td>
<td>.074</td>
<td>.519</td>
<td>.013</td>
</tr>
<tr>
<td>泣きたい</td>
<td>.418</td>
<td>.436</td>
<td>.465</td>
<td>.122</td>
</tr>
<tr>
<td>腹立たしい</td>
<td>.271</td>
<td>-.002</td>
<td>.208</td>
<td>.740</td>
</tr>
<tr>
<td>くやしい</td>
<td>.297</td>
<td>.119</td>
<td>.090</td>
<td>.709</td>
</tr>
<tr>
<td>イライラする</td>
<td>.207</td>
<td>.031</td>
<td>.290</td>
<td>.688</td>
</tr>
<tr>
<td>他人がうらやましい</td>
<td>.397</td>
<td>.298</td>
<td>.023</td>
<td>.509</td>
</tr>
<tr>
<td>どこかへ行きたい</td>
<td>-.197</td>
<td>.365</td>
<td>.242</td>
<td>.430</td>
</tr>
</tbody>
</table>

値が.40以上の項目は、第Ⅰ因子で13項目、第Ⅱ因子で5項目、第Ⅲ因子で7項目、第Ⅳ因子で5項目である。第Ⅰ因子は、「みじめな」(.765)、「情けない」(.711)、「わびしい」(.668)、「離外された」(.614)、「取り残された」(.606)といった項目に高く負荷していることから、「懐懲」因子と命名する。同様にして、第Ⅱ因子は、「誰かそばにいてほしい」(.868)、「誰かに会いたい」(.763)、「さびしい」(.757)、「誰かに甘えたい」(.665)、「誰かにすがりたい」(.576)より、「人懐懲」因子、第Ⅲ因子は、「死にたい」(.697)、「逃げてしまいたい」(.639)、「絶望的」(.613)、「何も信じられない」(.606)、「誰にも会いたくない」(.530)より、「絶望」因子、第Ⅳ因子は、「腹立たしい」(.748)、「くやしい」(.709)、「イライラする」(.688)、「他人がうらやましい」(.509)、「どこかへ行きたい」(.430)より、「苛立ち」因子と命名された。

3.2 対処行動の主成分分析

対処行動47項目の平均値および標準偏差を示したのが、表3である。この結果より、対処行動とし
表3 対処行動47題目の平均値および標準偏差

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>平均値</th>
<th>標準偏差</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>音楽を聴く</td>
<td>4.09</td>
<td>1.03</td>
</tr>
<tr>
<td>テレビをみる</td>
<td>3.82</td>
<td>1.13</td>
</tr>
<tr>
<td>寝る</td>
<td>3.79</td>
<td>1.16</td>
</tr>
<tr>
<td>自分を見つめ直す</td>
<td>3.64</td>
<td>1.14</td>
</tr>
<tr>
<td>何かに熱中する</td>
<td>3.54</td>
<td>1.32</td>
</tr>
<tr>
<td>親しい人に会う</td>
<td>3.51</td>
<td>1.28</td>
</tr>
<tr>
<td>空想にふるえる</td>
<td>3.46</td>
<td>1.25</td>
</tr>
<tr>
<td>時がたつのを待つ</td>
<td>3.43</td>
<td>1.21</td>
</tr>
<tr>
<td>何もしないでいる</td>
<td>3.42</td>
<td>1.24</td>
</tr>
<tr>
<td>ひとりになる</td>
<td>3.41</td>
<td>1.23</td>
</tr>
<tr>
<td>誰かにメールを送る</td>
<td>3.34</td>
<td>1.52</td>
</tr>
<tr>
<td>食べる</td>
<td>3.29</td>
<td>1.24</td>
</tr>
<tr>
<td>気持ちを打ち明ける</td>
<td>3.25</td>
<td>1.35</td>
</tr>
<tr>
<td>開き直る</td>
<td>3.19</td>
<td>1.19</td>
</tr>
<tr>
<td>じっと耐える</td>
<td>3.19</td>
<td>1.27</td>
</tr>
<tr>
<td>誰かに電話する</td>
<td>3.05</td>
<td>1.50</td>
</tr>
<tr>
<td>楽しいことを考える</td>
<td>3.04</td>
<td>1.32</td>
</tr>
<tr>
<td>買い物に行く</td>
<td>2.94</td>
<td>1.45</td>
</tr>
<tr>
<td>明るく振る舞う</td>
<td>2.85</td>
<td>1.20</td>
</tr>
<tr>
<td>身の回りを整理・整頓する</td>
<td>2.83</td>
<td>1.23</td>
</tr>
<tr>
<td>読書をする</td>
<td>2.83</td>
<td>1.48</td>
</tr>
<tr>
<td>お金をつかう</td>
<td>2.63</td>
<td>1.33</td>
</tr>
<tr>
<td>泣く</td>
<td>2.51</td>
<td>1.57</td>
</tr>
<tr>
<td>仕事や勉学に打ち込む</td>
<td>2.47</td>
<td>1.18</td>
</tr>
<tr>
<td>歩きまわる</td>
<td>2.44</td>
<td>1.32</td>
</tr>
<tr>
<td>酒を飲む</td>
<td>2.42</td>
<td>1.47</td>
</tr>
<tr>
<td>人にやつあたりをする</td>
<td>2.40</td>
<td>1.25</td>
</tr>
<tr>
<td>ケームをする</td>
<td>2.36</td>
<td>1.50</td>
</tr>
<tr>
<td>スポーツをする</td>
<td>2.35</td>
<td>1.39</td>
</tr>
<tr>
<td>パチンコをする</td>
<td>2.27</td>
<td>1.43</td>
</tr>
<tr>
<td>ラジオを聞く</td>
<td>2.21</td>
<td>1.46</td>
</tr>
<tr>
<td>バカ騒ぎをする</td>
<td>2.19</td>
<td>1.40</td>
</tr>
<tr>
<td>映画や劇を見に行く</td>
<td>2.18</td>
<td>1.31</td>
</tr>
<tr>
<td>人の多い所に行く</td>
<td>2.10</td>
<td>1.19</td>
</tr>
<tr>
<td>親に甘える</td>
<td>2.06</td>
<td>1.30</td>
</tr>
<tr>
<td>手紙を書く</td>
<td>2.04</td>
<td>1.25</td>
</tr>
<tr>
<td>ペットと遊ぶ</td>
<td>1.98</td>
<td>1.44</td>
</tr>
<tr>
<td>パコを吸う</td>
<td>1.14</td>
<td>1.57</td>
</tr>
<tr>
<td>日記をつける</td>
<td>1.91</td>
<td>1.39</td>
</tr>
<tr>
<td>料理をする</td>
<td>1.91</td>
<td>1.14</td>
</tr>
<tr>
<td>旅行に行く</td>
<td>1.80</td>
<td>1.14</td>
</tr>
<tr>
<td>車やバイクで走りまわる</td>
<td>1.90</td>
<td>1.91</td>
</tr>
<tr>
<td>楽器を演奏する</td>
<td>1.81</td>
<td>1.91</td>
</tr>
<tr>
<td>詩や歌をつくても</td>
<td>1.71</td>
<td>1.90</td>
</tr>
<tr>
<td>パチンコをする</td>
<td>1.40</td>
<td>1.03</td>
</tr>
<tr>
<td>マージンをする</td>
<td>1.28</td>
<td>0.78</td>
</tr>
<tr>
<td>クラブに踊りに行く</td>
<td>1.24</td>
<td>0.72</td>
</tr>
</tbody>
</table>

内容：

この研究では、孤児の感情、対処行動に及ぼす孤独感、およびAlonenessへの耐性の影響について論じています。特に、孤児が訪れる困難な状況をどのように対処するかを調査しました。対処行動の項目は47題目に設定されており、これらの項目の平均値と標準偏差を示しています。特に、音楽を聴く、テレビをみる、寝る、自分の見つめ直す、何かに熱中する、親しい人に会う、空想にふるえる、時がたつのを待つ、何もしないでいる、ひとりになる、誰かにメールを送る、食べる、気持ちを打ち明ける、開き直る、じっと耐える、誰かに電話する、楽しいことを考え、買い物に行く、明るく振る舞う、身の回りを整理・整頓する、読書をする、お金をつかう、泣く、仕事や勉学に打ち込む、歩きまわる、酒を飲む、人にやつあたりをする、ゲームをする、スポーツをする、パチンコをする、ラジオを聞く、バカ騒ぎをする、映画や劇を見に行く、人の多い所に行く、親に甘える、手紙を書く、ペットと遊ぶ、パコを吸う、日記をつける、料理をする、旅行に行く、車やバイクで走りまわる、楽器を演奏する、詩や歌をつくても、パチンコをする、マージンをする、クラブに踊りに行くなどの行動が示されています。
表4 対処行動47 項目の Varimax 回転後の因子負荷量

<table>
<thead>
<tr>
<th>因子</th>
<th>Ⅰ</th>
<th>Ⅱ</th>
<th>Ⅲ</th>
<th>Ⅳ</th>
<th>Ⅴ</th>
<th>Ⅵ</th>
<th>Ⅶ</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>談</td>
<td>.728</td>
<td>.209</td>
<td>.129</td>
<td>-.072</td>
<td>.077</td>
<td>-.002</td>
<td>.035</td>
</tr>
<tr>
<td>親しい人に出合う</td>
<td>-.699</td>
<td>.163</td>
<td>.040</td>
<td>-.338</td>
<td>-.103</td>
<td>.145</td>
<td>-.054</td>
</tr>
<tr>
<td>気持ちを明ける</td>
<td>.678</td>
<td>.112</td>
<td>.068</td>
<td>.019</td>
<td>.121</td>
<td>.066</td>
<td>-.195</td>
</tr>
<tr>
<td>談しにメールを送る</td>
<td>-.552</td>
<td>.003</td>
<td>.135</td>
<td>-.110</td>
<td>.238</td>
<td>.105</td>
<td>.109</td>
</tr>
<tr>
<td>音楽を聴く</td>
<td>.352</td>
<td>.118</td>
<td>.231</td>
<td>.096</td>
<td>-.018</td>
<td>.074</td>
<td>.263</td>
</tr>
<tr>
<td>身の回りを整理・整頓する</td>
<td>-.350</td>
<td>-.085</td>
<td>.240</td>
<td>.037</td>
<td>-.017</td>
<td>.301</td>
<td>.125</td>
</tr>
<tr>
<td>外で飲む</td>
<td>-.132</td>
<td>.868</td>
<td>-.054</td>
<td>.027</td>
<td>-.112</td>
<td>-.034</td>
<td>-.068</td>
</tr>
<tr>
<td>車やモバイルで歩きまわる</td>
<td>-.067</td>
<td>.663</td>
<td>-.094</td>
<td>.003</td>
<td>.067</td>
<td>-.001</td>
<td>.008</td>
</tr>
<tr>
<td>メシを食べる</td>
<td>-.007</td>
<td>.656</td>
<td>.009</td>
<td>.036</td>
<td>-.098</td>
<td>.185</td>
<td>.037</td>
</tr>
<tr>
<td>旅行に出かける</td>
<td>.002</td>
<td>.594</td>
<td>.184</td>
<td>-.172</td>
<td>.025</td>
<td>.164</td>
<td>-.059</td>
</tr>
<tr>
<td>バス騒ぎをする</td>
<td>.365</td>
<td>.562</td>
<td>.015</td>
<td>-.210</td>
<td>-.003</td>
<td>.156</td>
<td>-.178</td>
</tr>
<tr>
<td>スコーヒー</td>
<td>.121</td>
<td>.498</td>
<td>.239</td>
<td>-.181</td>
<td>-.267</td>
<td>-.021</td>
<td>.141</td>
</tr>
<tr>
<td>パソコンを</td>
<td>.110</td>
<td>.443</td>
<td>-.019</td>
<td>-.123</td>
<td>.142</td>
<td>-.139</td>
<td>.317</td>
</tr>
<tr>
<td>酒を飲む</td>
<td>.288</td>
<td>.334</td>
<td>.257</td>
<td>-.183</td>
<td>.021</td>
<td>-.104</td>
<td>-.088</td>
</tr>
<tr>
<td>料理をする</td>
<td>.040</td>
<td>-.102</td>
<td>.604</td>
<td>-.128</td>
<td>.174</td>
<td>.011</td>
<td>.119</td>
</tr>
<tr>
<td>美顔を整える</td>
<td>.141</td>
<td>.154</td>
<td>.570</td>
<td>.111</td>
<td>-.101</td>
<td>-.051</td>
<td>-.030</td>
</tr>
<tr>
<td>手紙を書く</td>
<td>.288</td>
<td>-.185</td>
<td>.567</td>
<td>.243</td>
<td>.187</td>
<td>.040</td>
<td>.061</td>
</tr>
<tr>
<td>他を説明する</td>
<td>.117</td>
<td>.091</td>
<td>.536</td>
<td>.201</td>
<td>.069</td>
<td>.251</td>
<td>-.051</td>
</tr>
<tr>
<td>彼女や恋人を見に行く</td>
<td>.020</td>
<td>.128</td>
<td>.568</td>
<td>-.055</td>
<td>-.061</td>
<td>.273</td>
<td>.121</td>
</tr>
<tr>
<td>日記をつくる</td>
<td>.065</td>
<td>-.009</td>
<td>.485</td>
<td>.306</td>
<td>.214</td>
<td>-.139</td>
<td>-.151</td>
</tr>
<tr>
<td>旅行に出かける</td>
<td>.164</td>
<td>.290</td>
<td>.382</td>
<td>-.215</td>
<td>.152</td>
<td>.313</td>
<td>-.175</td>
</tr>
<tr>
<td>親しい人に出合う</td>
<td>-.245</td>
<td>-.093</td>
<td>-.095</td>
<td>-.088</td>
<td>-.054</td>
<td>.001</td>
<td>.192</td>
</tr>
<tr>
<td>青年を待つ</td>
<td>-.008</td>
<td>-.157</td>
<td>-.090</td>
<td>.665</td>
<td>.245</td>
<td>.029</td>
<td>.238</td>
</tr>
<tr>
<td>自分を見つめ直す</td>
<td>.191</td>
<td>-.037</td>
<td>.155</td>
<td>-.540</td>
<td>-.056</td>
<td>.317</td>
<td>-.194</td>
</tr>
<tr>
<td>ひとりになる</td>
<td>-.308</td>
<td>-.054</td>
<td>.311</td>
<td>.492</td>
<td>-.031</td>
<td>.079</td>
<td>-.066</td>
</tr>
<tr>
<td>何もしていない</td>
<td>-.227</td>
<td>-.181</td>
<td>.241</td>
<td>.476</td>
<td>.138</td>
<td>-.145</td>
<td>-.079</td>
</tr>
<tr>
<td>空想が起こる</td>
<td>-.033</td>
<td>.018</td>
<td>.934</td>
<td>.472</td>
<td>.158</td>
<td>.076</td>
<td>-.026</td>
</tr>
<tr>
<td>詩や歌をつくる</td>
<td>.195</td>
<td>.259</td>
<td>.327</td>
<td>.421</td>
<td>-.265</td>
<td>-.048</td>
<td>.024</td>
</tr>
<tr>
<td>食べる</td>
<td>-.032</td>
<td>-.073</td>
<td>.151</td>
<td>-.144</td>
<td>.622</td>
<td>-.014</td>
<td>.002</td>
</tr>
<tr>
<td>人とやつありをする</td>
<td>.008</td>
<td>.003</td>
<td>-.020</td>
<td>.138</td>
<td>.809</td>
<td>.005</td>
<td>-.029</td>
</tr>
<tr>
<td>親を思い出す</td>
<td>.228</td>
<td>-.133</td>
<td>.148</td>
<td>.201</td>
<td>.508</td>
<td>-.014</td>
<td>-.096</td>
</tr>
<tr>
<td>買い物に行く</td>
<td>.143</td>
<td>.080</td>
<td>.320</td>
<td>-.080</td>
<td>.507</td>
<td>.436</td>
<td>.077</td>
</tr>
<tr>
<td>まとめを読む</td>
<td>.092</td>
<td>-.074</td>
<td>-.157</td>
<td>.062</td>
<td>.498</td>
<td>.070</td>
<td>.382</td>
</tr>
<tr>
<td>お金をつかむ</td>
<td>.111</td>
<td>.212</td>
<td>.166</td>
<td>-.022</td>
<td>.494</td>
<td>.346</td>
<td>-.074</td>
</tr>
<tr>
<td>泣く</td>
<td>.322</td>
<td>-.208</td>
<td>.054</td>
<td>.395</td>
<td>.401</td>
<td>-.055</td>
<td>-.299</td>
</tr>
<tr>
<td>楽しいことを考える</td>
<td>.286</td>
<td>-.014</td>
<td>.037</td>
<td>.026</td>
<td>-.169</td>
<td>.667</td>
<td>.275</td>
</tr>
<tr>
<td>開き直る</td>
<td>-.100</td>
<td>.128</td>
<td>.065</td>
<td>.097</td>
<td>.036</td>
<td>.624</td>
<td>-.012</td>
</tr>
<tr>
<td>明るく振る舞う</td>
<td>.292</td>
<td>-.003</td>
<td>.292</td>
<td>.014</td>
<td>.178</td>
<td>.535</td>
<td>-.040</td>
</tr>
<tr>
<td>人の多い所に行く</td>
<td>.292</td>
<td>.292</td>
<td>.283</td>
<td>-.110</td>
<td>.076</td>
<td>.358</td>
<td>.258</td>
</tr>
<tr>
<td>テレビを</td>
<td>.292</td>
<td>-.092</td>
<td>.067</td>
<td>.082</td>
<td>-.054</td>
<td>.073</td>
<td>.633</td>
</tr>
<tr>
<td>パソコンで遊ぶ</td>
<td>-.120</td>
<td>-.026</td>
<td>.043</td>
<td>-.022</td>
<td>.058</td>
<td>.055</td>
<td>.532</td>
</tr>
<tr>
<td>ゲームを</td>
<td>-.341</td>
<td>.253</td>
<td>-.245</td>
<td>-.104</td>
<td>.029</td>
<td>-.151</td>
<td>.497</td>
</tr>
<tr>
<td>仕事や勉強に打ち込む</td>
<td>-.006</td>
<td>-.104</td>
<td>.270</td>
<td>.289</td>
<td>-.037</td>
<td>.049</td>
<td>.398</td>
</tr>
<tr>
<td>読書をする</td>
<td>-.133</td>
<td>-.298</td>
<td>.374</td>
<td>-.002</td>
<td>.014</td>
<td>.042</td>
<td>.241</td>
</tr>
<tr>
<td>学ぶ</td>
<td>-.050</td>
<td>.024</td>
<td>.080</td>
<td>-.029</td>
<td>.181</td>
<td>.103</td>
<td>.021</td>
</tr>
<tr>
<td>何かに集中する</td>
<td>-.022</td>
<td>.200</td>
<td>.055</td>
<td>-.103</td>
<td>-.050</td>
<td>.068</td>
<td>.244</td>
</tr>
<tr>
<td>ベットと遊ぶ</td>
<td>.326</td>
<td>.200</td>
<td>-.065</td>
<td>.163</td>
<td>-.001</td>
<td>-.074</td>
<td>.177</td>
</tr>
</tbody>
</table>

分を見つめ直す」(.540)、「ひとりになる」(.492)、「何もしないている」(.476)、「空想をふるう」(.472)、「詩や歌をつくる」(.421) より、「忍耐・待機」因子、第Ⅴ因子は、「食べる」(.622)、「人にやつあるををする」(.609)、「親に甘える」(.508)、「買い物に行く」(.507)、「テレビをみる」(.498)、「お金をつかむ」(.494)、「泣く」(.401) より、「甘え・消費」因子、第Ⅵ因子は、「楽しいことを考える」(.667)、「聞き直る」(.624)、「明るく振る舞う」(.535) より、「聞き直る」因子、第Ⅵ因子は、「ラジオを聞く」(.633)、「パソコンで遊ぶ」(.532)、「TV ゲームをする」(.497) より、「メディア親和性」因子、第Ⅶ因子は、「読書をする」(.515)、「寝る」(.502)、「何か（趣味など）に熱中する」(.437) より、「趣味への熱中」因子と命名された。
3.3 簡略版CBA尺度の主成分分析

簡略版CBA尺度10項目の相関マトリックスからScreetestにより最終的に因子数を2と決定し、主成分分析を行いVarimax回転後の因子負荷量を示したのが表5である。これらの累積分散寄与率は51.91%であり、回転後の因子負荷量の絶対値が.50以上の項目は、第1因子が「孤独不安耐性」因子の5項目、第2因子が「孤独受容」因子の5項目である。したがって、「孤独不安耐性」因子はCBA I尺度に、「孤独受容」因子はCBA II尺度に対応し、原尺度の2因子を反映する下位尺度といえる。なお、各尺度の信頼性を尺度水準で検討するためにα係数が算出されたが、それぞれα=.81, α=.68より尺度の内の一貫性は充分に高いといえる。

表5 簡略版CBA尺度10項目のVarimax回転後の因子負荷量

<table>
<thead>
<tr>
<th>因子</th>
<th>I</th>
<th>II</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>一人でいるとき気晴らな気分になる時がある</td>
<td>.831</td>
<td>.032</td>
</tr>
<tr>
<td>ひとりぼっちに耐えられない時がある</td>
<td>.788</td>
<td>.089</td>
</tr>
<tr>
<td>孤独を感じて、だれかに話して欲しいと思うようになる</td>
<td>.751</td>
<td>.033</td>
</tr>
<tr>
<td>一つことも恋しいことがあった時には、よく誰かに…</td>
<td>.730</td>
<td>-.074</td>
</tr>
<tr>
<td>一人でいると、物事をどんどん悪い方向に考えてしまう</td>
<td>.828</td>
<td>.033</td>
</tr>
<tr>
<td>他人から離れて自分を深く見つめることは非常に…</td>
<td>-.080</td>
<td>.743</td>
</tr>
<tr>
<td>自分ひとりの時間は、よりよい自分になるために…</td>
<td>.009</td>
<td>.724</td>
</tr>
<tr>
<td>人と過ごす時間と同じくらい、一人で過ごす時間も重要…</td>
<td>.178</td>
<td>.831</td>
</tr>
<tr>
<td>一人でいると、とてもリラックスした気分になる</td>
<td>.247</td>
<td>.788</td>
</tr>
<tr>
<td>煩わしい人間関係から距離を置いて一人になりたいと…</td>
<td>-.225</td>
<td>.577</td>
</tr>
</tbody>
</table>

3.4 尺度間相関、および携帯電話の使用頻度との関連性

改訂版UCLA孤立感尺度、Alonenessへの耐性尺度、CBA I尺度、CBA II尺度、および携帯電話の使用頻度との相関を示したものが、表6である。これより、尺度間の関連性をみると、Alonenessへの耐性尺度は、CBA I尺度（「孤独不安耐性」因子）とやや高い正の相関（r=.467, p<.001）が、また、CBA II尺度（「孤独受容」因子）とやや低い正の相関（r=.312, p<.01）があり、改訂版UCLA孤立感尺度とも非常に低い正の相関（r=.145, p<.05）がみられた。

表6 改訂版UCLA孤立感尺度、Alonenessへの耐性尺度、CBA I尺度、CBA II尺度、および携帯電話の使用頻度との相関

<table>
<thead>
<tr>
<th>因子</th>
<th>UCLA</th>
<th>耐性尺度</th>
<th>CBA I</th>
<th>CBA II</th>
<th>携帯電話</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>改訂版UCLA孤立感尺度</td>
<td>—</td>
<td>.145*</td>
<td>.055</td>
<td>-.014</td>
<td>-.451***</td>
</tr>
<tr>
<td>Alonenessへの耐性尺度</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
<td>.467***</td>
<td>.312***</td>
<td>-.220**</td>
</tr>
<tr>
<td>CBA I尺度</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
<td>.066</td>
<td>-.290***</td>
</tr>
<tr>
<td>CBA II尺度</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
<td>-.115</td>
</tr>
<tr>
<td>携帯電話の使用頻度</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注）* p<.05, ** p<.01, *** p<.001
次に、携帯電話の使用頻度と各尺度との関連性をみると、改訂版 UCLA 孤独感尺度との間にやや高い負の相関（r = -0.451, p < 0.001）が見出された。そこで、携帯電話の使用頻度別に孤独感スコアを算出したものが、表7である。これより、携帯電話の使用頻度が高くなるにつれて孤独感が低くなっていることがわかる。また、携帯電話の使用頻度とCBA I尺度、およびAlonenessへの耐性尺度との間に低い負の相関（r = -0.290, p < 0.001; r = -0.220, p < 0.001）がみられた。

<table>
<thead>
<tr>
<th>携帯電話の使用頻度</th>
<th>平均値</th>
<th>標準偏差</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>おおいにとっては</td>
<td>33.47</td>
<td>7.96</td>
</tr>
<tr>
<td>かなりにとっては</td>
<td>36.97</td>
<td>7.03</td>
</tr>
<tr>
<td>ややにとっては</td>
<td>37.30</td>
<td>6.59</td>
</tr>
<tr>
<td>普通</td>
<td>38.64</td>
<td>8.72</td>
</tr>
<tr>
<td>ややとっていない</td>
<td>44.81</td>
<td>10.79</td>
</tr>
<tr>
<td>かなりとっていない</td>
<td>46.64</td>
<td>9.88</td>
</tr>
<tr>
<td>全くとっていない</td>
<td>33.47</td>
<td>9.85</td>
</tr>
</tbody>
</table>

3.5 孤独の感情、および対処行動の性差

因子別に、孤独の感情、および対処行動の性差を示したものがあるが、表8である。孤独に陥ったときの感情反応に関しては、男性よりも女子の方が、「憐憫」の感情が高、「人恋しさ」も強い。さらに、「絶望」感をより抱き、「苛立ち」をより感じている。このことから、感情反応はすべての因子について男子よりも女子の方が強いといえる。

次に、対処行動に関しては、男子の方は「憂さ晴らし」行動をよくとる、「メディア親和性」も高いのに対し、女子の方は「甘え・消費」行動がよくみられ、「情緒的逃避」や「忍耐・待機」といった行動もよくとられることがわかる。

<table>
<thead>
<tr>
<th>因 子</th>
<th>男子</th>
<th>女子</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>感情反応</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>I 憐恤</td>
<td>2.22</td>
<td>2.76</td>
</tr>
<tr>
<td>II 人恋しさ</td>
<td>2.72</td>
<td>3.25</td>
</tr>
<tr>
<td>III 絶望</td>
<td>1.84</td>
<td>2.39</td>
</tr>
<tr>
<td>IV 苦立詰</td>
<td>2.28</td>
<td>2.56</td>
</tr>
<tr>
<td>対処行動</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>I 対人接触</td>
<td>3.20</td>
<td>3.38</td>
</tr>
<tr>
<td>II 憂さ晴らし</td>
<td>2.12</td>
<td>1.40</td>
</tr>
<tr>
<td>III 情緒的逃避</td>
<td>1.75</td>
<td>2.33</td>
</tr>
<tr>
<td>IV 忍耐・待機</td>
<td>2.92</td>
<td>3.43</td>
</tr>
<tr>
<td>V 甘え・消費</td>
<td>2.43</td>
<td>3.17</td>
</tr>
<tr>
<td>VI 開き直り</td>
<td>3.04</td>
<td>3.01</td>
</tr>
<tr>
<td>VII メディア親和性</td>
<td>2.53</td>
<td>2.03</td>
</tr>
<tr>
<td>VIII 趣味への熱中</td>
<td>3.32</td>
<td>3.45</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注）(*)p<0.10, *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

- 89 -
3.6 孤独の感情、および対処行動の孤独感強度による差

改訂版 UCLA 孤独感尺度を用いて孤独感を測定した結果、男子で 40.16、女子で 40.67 となり、両者の間に有意差はみられなかった。しかし、上述したように、孤独の感情、および対処行動の性差がかなり認められている。そこで、男女別に孤独感スコアの中央値により High 群と Low 群に分け、因子別に孤独の感情、および対処行動の差を示したものが、表9である。まず、感情反応に関しては、男女ともに孤独感が高いほど「絶望」感情を抱いていることがわかる。さらに、男子では、孤独感が高いほど「憐憫」の感情が強く、孤独感が低いほど「人懸き」の感情を抱くことが示された。

一方、対処行動に関しては、男女ともに孤独感が高いほど「対人接触」をしたり、「憂さ晴らし」活動をとることが示された。また、女子では、孤独感が高いほど「忍耐・待機」「メディア親和性」「甘え・消費」などの対処行動をとるのに対し、女子では、孤独感が低いほど「開き直り」の行動をとることが見出された。

<table>
<thead>
<tr>
<th>因 子</th>
<th>孤 独 感(男子)</th>
<th>孤 独 感(女子)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>High</td>
<td>Low</td>
</tr>
<tr>
<td>感情反応 I 憐惜</td>
<td>2.35</td>
<td>2.07</td>
</tr>
<tr>
<td>II 人恋しさ</td>
<td>2.52</td>
<td>2.87</td>
</tr>
<tr>
<td>III 絶望</td>
<td>2.03</td>
<td>1.66 **</td>
</tr>
<tr>
<td>IV 勇立ち</td>
<td>2.30</td>
<td>2.26</td>
</tr>
<tr>
<td>対処行動 I 対人接触</td>
<td>2.65</td>
<td>3.72 ***</td>
</tr>
<tr>
<td>II 憔き晴らし</td>
<td>1.86</td>
<td>2.38 **</td>
</tr>
<tr>
<td>III 情緒的逃避</td>
<td>1.78</td>
<td>1.72</td>
</tr>
<tr>
<td>IV 忍耐・待機</td>
<td>3.09</td>
<td>2.79</td>
</tr>
<tr>
<td>V 甘え・消費</td>
<td>2.56</td>
<td>2.31</td>
</tr>
<tr>
<td>VI 開き直り</td>
<td>2.99</td>
<td>3.08</td>
</tr>
<tr>
<td>VII メディア親和性</td>
<td>2.79</td>
<td>2.33 *</td>
</tr>
<tr>
<td>VIII 趣味への熱中</td>
<td>3.44</td>
<td>3.24</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注) *p<.05, **p<.01, ***p<.001

<table>
<thead>
<tr>
<th>因 子</th>
<th>Aloneness への耐性(男子)</th>
<th>Aloneness への耐性(女子)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>High</td>
<td>Low</td>
</tr>
<tr>
<td>感情反応 I 憐惜</td>
<td>2.15</td>
<td>2.29</td>
</tr>
<tr>
<td>II 人恋しさ</td>
<td>2.57</td>
<td>2.86</td>
</tr>
<tr>
<td>III 絶望</td>
<td>1.81</td>
<td>1.87</td>
</tr>
<tr>
<td>IV 勇立ち</td>
<td>2.25</td>
<td>2.30</td>
</tr>
<tr>
<td>対処行動 I 対人接触</td>
<td>2.96</td>
<td>3.49</td>
</tr>
<tr>
<td>II 憔き晴らし</td>
<td>1.97</td>
<td>2.30</td>
</tr>
<tr>
<td>III 情緒的逃避</td>
<td>1.78</td>
<td>1.73</td>
</tr>
<tr>
<td>IV 忍耐・待機</td>
<td>2.95</td>
<td>2.89</td>
</tr>
<tr>
<td>V 甘え・消費</td>
<td>2.39</td>
<td>2.48</td>
</tr>
<tr>
<td>VI 開き直り</td>
<td>3.90</td>
<td>3.00</td>
</tr>
<tr>
<td>VII メディア親和性</td>
<td>2.65</td>
<td>2.42</td>
</tr>
<tr>
<td>VIII 趣味への熱中</td>
<td>3.45</td>
<td>3.20</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注) (*)p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

- 90 -
3.7 孤独の感情、および対処行動のAlonenessへの耐性による差

Alonenessへの耐性を測定した結果、男子で31.77、女子で28.29となり、男子の方が有意に高かった（p < .01）。そこで、男女別に耐性スコアの中央値によりHigh群とLow群に分け、因子別に孤独の感情、および対処行動の差を示したものが、表10である。まず、感情反応に関しては、男女ともにAlonenessへの耐性が低いほど「人恋しさ」の感情が強く、さらに、女子では、耐性が低いほど「憐憫」の感情を抱く傾向がみられた。

一方、対処行動に関しては、男女ともにAlonenessへの耐性が低いほど「対人接触」をすることが見出された。また、男子では、Alonenessへの耐性が低いほど「憂き晴らし」行動をとるのに対し、女子では、耐性が高いほど「忍耐・待機」の行動をとることが示された。

4. 考 察

まず、孤独の感情、および対処行動に関する因子構造について、広沢（1985①、1997②）の結果と比較検討する。孤独の感情については、「憐憫」「人恋しさ」「絶望」「苛立ち」の4因子が抽出されており、1997年の結果（「抑うつ」「恐れ・不信」「人恋しさ」「苛立ち」）と因子数は等しいもののその内容は若干異なる。また、1985年の結果（「抑うつ」「絶望」「人恋しさ」「憐憫」「苛立ち」「疎外感」）と比較すると、因子数は減少しているものの内容的にはこれら6因子に含まれていることがわかる。すなわち、因子の内容から吟味すると、今回得られた「憐憫」因子には、1985年に抽出された「抑うつ」「疎外感」の3因子が、また、今回得られた「絶望」因子には、1985年に抽出された「抑うつ」「恐れ・不信」の2因子が、それぞれ結合して抽出されたと考えられる。そこで、「人恋しさ」と「苛立ち」の2因子は、すべての結果に共通していることから、非常に安定した因子であり、「憐憫」と「絶望」の2因子もかなり安定した因子といえる。

ところで、広沢（1985①）は、感情反応の方向性（1）対自的（2）対他的）の次元と感情の表現方法（（a）情緒的、（b）評価的、（c）行動的）の2×3の6カテゴリーを設定し、抽出した6因子を対応させている。この考え方に準拠すると、本研究で抽出された4因子は、「憐憫」因子（対自的－情緒的）、「人恋しさ」因子（対他的－行動的）、「絶望」因子（対自的－行動的）、「苛立ち」因子（対他－情緒的）となり、評価的な感情の表現方法が消失していることがわかる。したがって、感情反応の方向性（1）対自的（2）対他的）の次元と感情の表現方法（（a）情緒的、（b）行動的）の2×2の4カテゴリーに集約され、1997年と約一致する結果が得られた。

一方、対処行動に関しては、「対人接触」「憂き晴らし」「情緒的逃避」「忍耐・待機」「甘え・消費」「開き直り」「メディア親和性」「趣味への熱中」の8因子が抽出されており、1997年に抽出された2因子（「憂き晴らし」「対人接触」「忍耐・待機」「積極的独居」「身近な行動への逃避」「悲しみ抵抗」「情緒的逃避」）、および1985年に抽出された2因子（「憂き晴らし」「趣味・仕事への没頭」「対人接触」「忍耐・待機」「身近な行動への逃避」「情緒的逃避」「甘え」）よりも増加している。そこで、因子の内容を吟味すると、「対人接触」「憂き晴らし」「情緒的逃避」「忍耐・待機」の4因子は、すべての結果に
孤独の感情、対処行動に及ぼす孤独感、およびAlonenessへの耐性の影響

共通していることから、非常に安定した対処行動因子といえる。さらに、残りの4因子を1985年の結果と比較すると、「趣味への熱中」因子は「趣味・仕事への没頭」因子と類似しており、「甘え・消費」因子は、「身近な行動への逃避」および「甘え」の2因子が結合して抽出されたと考えられる。したがって、「開き直り」因子と「メディア親和性」因子が、過去2回の結果では得られなかった新しい対処行動因子であると推察される。とりわけ「メディア親和性」因子は、情報化の進展の中で生起してきた、現代人特有の対処行動と考えられるが、さらに検討したい。

また、広沢（1985）は、感情反応の場の場合と同様に、対処行動の方向性（1）対象的、（2）対他的、（3）対人親和的）の次元とその構造（動的－静的）を示す要因を組み合わせて、抽出した7因子を対応させていく。この考え方に準拠すると、本研究で抽出された8因子も以下のようにあてはめることができる。すなわち、対人的次元では、動的な構造品は存在せず、「甘え・消費」因子が対応し、対他次元では、動的な構造を示すものとして「対人接触」因子、静的な構造としては「開き直り」因子、対自次元では、動的な構造から静的な構造の傾向に、「憂き晴らし」因子、「趣味への熱中」因子、「情緒的逃避」因子、「メディア親和性」因子、そして「忍耐・待機」因子が対応している。

次に、簡略版CBA尺度の因子構造をみると、第Ⅰ因子（CBA I尺度）は「孤独不安耐性」因子、第Ⅱ因子（CBA II尺度）は「孤独受容」因子と命名され、原尺度の第Ⅰ因子、第Ⅱ因子に対応するものであった。また、各因子に高く負荷した項目はすべて、原尺度の因子分析の結果と一致するものであり、両尺度の信頼性も充分に高いことが示された。

そこで、改訂版ULCA孤独感尺度、Alonenessへの耐性尺度、CBAI尺度、CBA II尺度、および携帯電話の使用頻度との関連性を相互関係より検討する。Alonenessへの耐性尺度は、CBAI尺度（「孤独不安耐性」因子）とやや高い正の相関（r = .467, p < .001）が、また、CBA II尺度（「孤独受容」因子）とやや低い正の相関（r = .312, p < .01）があることから、Alonenessへの耐性は、孤独不安への耐性とある程度関連しており、孤独の受容とも関わりがあると考えられる。また、改訂版ULCA孤独感尺度とも相関がみられたが、非常に低い（r = .145, p < .05）ことから関連性は非常に弱いといえる。

次に、携帯電話の使用頻度と各尺度との関連性をみると、改訂版ULCA孤独感尺度との間にやや高い負の相関（r = -.451, p < .001）が見出された。そこで、携帯電話の使用頻度別に孤独感スコアを比較すると、携帯電話の使用頻度が高くなるにつれて孤独感が低くなっていることがわかる。現在の大学生にとって、携帯電話は必要不可欠なコミュニケーションツールになっていると考えられ、携帯電話による頻繁な対人コミュニケーションによって孤独感を低減していると推測される。この点に関しては、携帯電話によるコミュニケーションの質的側面も考慮し、今後さらに検討したい。また、CBA I尺度、およびAlonenessへの耐性尺度との間に低い負の相関（r = -.290, p < .001; r = -.220, p < .001）がみられていることから、ひとりに耐えられない人ほど携帯電話を使用することも伺われるが、併せて今後の課題にしたい。

続いて、孤独の感情、および対処行動の性別について、因子別にみたものを、広沢（198621）、199722）の結果と比較検討する。孤独の感情については、「懐懐」「人恋しが」「絶望」「背立ち」の4因子すべてにおいて、男子よりも女子で顕著に反応がみられ、1997年と同一の結果が得られた。また、1986年
孤独の感情、対処行動に及ぼす孤独感、およびAlonenessへの耐性の影響

の結果でも、6因子のうち「抑うつ」「絶望」「人恋しさ」「疎外感」の4因子で同様の傾向が認められていることから、このことは、感受性の相違による感情表現の差として表出したものと推測されるが、今後の課題としたい。なお、1986年の結果では、「苦立ち」因子のみ、逆の結果となっているが、この点に関してもさらに検討する必要がある。

対処行動に関しては、男性の方が「憂き晴らし」や「メディア親和性」行動をよくとるのに対し、女子は「忍耐・待機」を、「甘え・消費」行動や「情緒的逃避」がよくみられる。1986年の結果では、男性は「憂き晴らし」、女子は「身近な行動への逃避」「情緒的逃避」「甘え」「忍耐・待機」をよくとり、「対人接触」も高い傾向にあった。この「対人接触」を除くと、今回の「甘え・消費」因子は、「身近な行動への逃避」の2因子が結合したものと考えられるので、両者はかなり類似した結果といえる。1997年の結果では、男性の方が「憂き晴らし」をよくとるのに対し、女子は「悲しき抵抗」「対人接触」「積極的独居」などがよくみられ、すべての結果において一致しているものは、男子の「憂き晴らし」と女子の「甘え・消費」（それぞれ「甘え」「悲しき抵抗」に対応）行動といえる。女子によくみられる他の対処行動因子については、一貫した結果が得られておらず、この点に関してもさらに検討したい。

次に、孤独の感情、および対処行動の孤独感強度による差を検討していくことにする。まず、改訂版UCLA孤独感尺度を用いて孤独感を測定した結果、性差は認められなかったが、孤独の感情、および対処行動の性差が顕著であったので、男女別に孤独感スコアの中央値によりHigh群とLow群に分け、それらの差を因子別に検討したわけである。まず、感情反応に関しては、男女ともに孤独感が高いほど「絶望」感（対自的）を抱くことがわかる。また、男子では、孤独感が高いほど「懐疑」（対自的）の感情が強いのに対し、孤独感が低いほど「人恋しさ」（対他的）の感情を抱くことが示された。一方、対処行動に関しては、男女ともに孤独感が高いほど「対人接触」（対他的）をしたり、「憂き晴らし」（対自的）をすることが示された。また、男子では、孤独感が高いほど「忍耐・待機」（対自的）、「メディア親和性」（対自的）、「甘え・消費」（対他他的）などの対処行動をとるのに対し、女子では、孤独感が高いほど「聞き直り」（対他的）の行動をとることが示された。

以上より、孤独感の高い人は、対自的、対他的な感情が生起しやすく、その結果、対自的な対処行為をとりやすいのに対し、孤独感の低い人は、対自の対他的な感情を抱き、その結果、対自的な対処行動をとる傾向にあることが示唆された。ただし、「憂き晴らし」（対自的）だけは例外で、孤独感の低い人特有の対処行動であり、とりわけ男子の優着にみられるものである。また、「甘え・消費」（対他他的）行動は、孤独感の高い男子にみられるものであるが、この点に関してもさらに検討する必要がある。

続いて、孤独の感情、および対処行動のAlonenessへの耐性による差を検討していくことにする。まず、Alonenessへの耐性の性差をみると、女子よりも男性の方が高いことが示され（p < .01）、ひとりに耐えられる力は男性の方が高いということである。そこで、男女別に耐性スコアの中央値によりHigh群とLow群に分け、孤独の感情、および対処行動の差が因子別に検討された。孤独の感情に関しては、男女ともにAlonenessへの耐性の低い方が、「人恋しさ」（対他他）の感情が強いことから、ひとりに耐えられない人ほど対他的な感情を抱くと考えられる。ただ、女子では、耐性が低いほど「懐疑」（対自的）の感情を抱く傾向がみられ、このことについてはさらに検討する必要がある。
孤独の感情、対処行動に及ぼす孤独感、およびAlonenessへの耐性の影響

対処行動に関しては、男女ともにAlonenessへの耐性が低いほど「対人接触」（対他）をすることが見出され、男子では、耐性が低いほど「憂き暗らし」（対他）を、女子では、耐性が高いほど「忍耐・待機」（対他）の行動をとることが示された。したがって、感情反応と同様に、ひとりに耐えられない人ほど対他的な行動をとるのに対し、ひとりに耐えられる人ほど対他的な行動をとると考えられる。ただし、孤独感強度による差の場合と同様に、「憂き暗らし」（対他）だけは例外で、Alonenessへの耐性が低い男子特有の対処行動であると考えられる。

最後に、本研究で得られた知見を簡潔に振り返り、今後の課題を明確にしておきたい。孤独の感情の4因子、および対処行動の8因子は、過去の研究結果と比較検討した結果、かなり定着した因子であることが示された。そして、両者にはかなりの相関が存在するとともに、孤独感強度による差、ならびにAlonenessへの耐性による差も見出され、対他一対他の次元から説明された。次に、尺度間の関連性、および携帯電話の使用頻度との関連性が示唆され、Alonenessへの耐性尺度は、簡略版CBA尺度の2つの因子（「孤独不安耐性」因子と「孤独受容性」因子）と関連性のあることが示された。このことから、ひとりに耐えられる力とひとりでいる能力、ある程度関係性があると思われるが、この点に関しては、Alonenessへの耐性尺度とCBA尺度42項目を用いて詳細に検討する必要があり、今後の課題としたい。また、孤独感と携帯電話の使用頻度との間にはやや高い負の相関が認められ、その使用頻度が高いほど孤独感の低いことが示された。この点においても、携帯電話の量的側面（使用頻度）だけでなく、質的側面（コミュニケーションの内容や相手との関係性など）も考慮し、さらに追求していきたい。

あとがき

本研究を実施するためにあたり、三條リサ・宮武真世両氏（平成13年度鉾田市立大学大学院文学研究科心理学専攻修士課程修了）の協力を得ました。ここに記して深く感謝いたします。

引用文献
2) 広沢俊宗：「孤独の原因、感情反応、および対処行動に関する研究(1)」『関西学院大学社会学部紀要』51号 1985 157-168頁
3) 広沢俊宗：「孤独の原因、感情反応、および対処行動に関する研究(2)」『関西学院大学社会学部紀要』53号 1986 127-136頁
4) 広沢俊宗：「孤独の原因、感情反応、および対処行動に関する研究(3)」『関西国際大学研究紀要』2号 2001 85-96頁
5) 広沢俊宗：「孤独の感情、および対処行動に及ぼすAlonenessへの耐性の影響」『関西女学院短期大学紀要』11号 1997 91-102頁

-94-
7) 野本美奈子：「一人でいる能力（The Capacity to Be Alone）に関する基礎的研究－一人を抱えていきることの臨床心理学的意味－」平成10年度大阪大学大学院人間科学研究科修士論文 1999

8) 前掲書 2)

9) 前掲書 5)

10) 前掲書 2)

11) 前掲書 2)


14) 工藤力・西川正之：「孤独感に関する研究(1)－孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討－」実験社会心理学研究 22巻 1983 99-108頁

15) 前掲書 5)

16) 前掲書 7)

17) 前掲書 2)

18) 前掲書 5)

19) 前掲書 2)

20) 前掲書 2)

21) 前掲書 3)

22) 前掲書 5)
Abstract

This study has three purposes; (a) to examine the factor structures of feelings when lonely and coping behaviors, (b) to examine their differences by sex, degree of loneliness and tolerance to aloneness, and (c) to examine the relationships among a shortened version of CBA Scale, Revised UCLA Loneliness Scale, Tolerance to Aloneness Scale and the frequency of using a portable phone. The shortened version of CBA Scale was made based on CBA Scale (Capacity to Be Alone Scale) which Nomoto (1999) constructed. Three kinds of questionnaires and three kinds of scales were administered to undergraduate students ($N = 196$).

The results are as follows.

1) Using factor analysis on feelings and coping behaviors when lonely, four and eight reliable, interpretable factors emerged. And they revealed that there are differences in those factors by sex, degree of loneliness and tolerance to aloneness. These consequences were compared with those of the past studies.

2) Tolerance to Aloneness Scale is correlated with two subscales of CBA Scale and their concepts were compared. Loneliness is highly, negatively correlated with the frequency of using a portable phone, suggesting that lesslonely people tend to use a portable phone more frequently.